

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月24日現在

機関番号：56101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02873

研究課題名(和文) 英語のリーディングに関する学習ストラテジー指導教材の開発と評価

研究課題名(英文) Strategy assessment and material development in L2 English reading

研究代表者

勝藤 和子 (Katsufuji, Kazuko)

阿南工業高等専門学校・創造技術工学科・教授

研究者番号：50363130

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：言語学習ストラテジー指導教材開発の基礎研究として、OxfordのS2Rモデルに基づいた学習ストラテジーの質問紙を開発し、因子分析を実施した。「受動的動機性」、「能動的学習傾向」、「調和性」、「自己肯定感」の4因子が抽出された。因子別の記述統計では、「能動的学習傾向」の値が最も低く、この領域の指導が今後課題であることがわかった。

S2Rモデルでは、学習者は戦略的自律学習者として、コンテキストに応じたストラテジーを選び合わせて使用するとされている。本研究において開発した質問紙の分析結果は、S2Rモデルの学習者の特性を示すことを可能にし、今後のストラテジー指導教材開発のための基礎的研究となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、Oxford (2011)に基づいた学習ストラテジーの質問紙を考案したところである。開発した質問紙を用いて因子分析を行い、高専生の学習ストラテジーの特性も明らかにした。学習ストラテジーについては、SILLを用いた研究が多くなされ、メタ認知ストラテジーの強化が研究の主流だった。本研究では、学習者を関心の中心に据え、ストラテジーの選択行為はこれまでの考え方のように単純なものではなく、複数の領域のストラテジーが絡み合う複雑なものとしている。本研究は、学習者の置かれたコンテキストに適切な言語学習ストラテジーを指導することを主張した点において、斬新であり、社会的な意義がある。

研究成果の概要(英文)：A questionnaire for learning strategies based on Oxford's S2R model was developed. A factor analysis of the collected data was performed, and four factors were extracted: "diligent but passive learning style," "active learning style," "adaptability" and "self-affirmation." In the descriptive statistics, the value of "active learning style" was the lowest, and it turned out that teaching the strategies in this area will be an issue in the future. In the S2R model, strategic self-regulated language learners choose strategies according to the context in which they are placed and use strategies in combination. The questionnaire developed in this study was able to indicate the property of the S2R model. Furthermore, the characteristics of the language learning strategy of Kosen students were shown clearly. As a result, the current study works as fundamental research of material development for teaching language learning strategies.

研究分野：英語科教育

キーワード：高専 学習ストラテジー L2リーディング 自己調整力

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

高等専門学校（以下、高専）は、技術者を養成する高等教育機関であり、学生の専門性を高めるために、カリキュラムの中心が理系教科や専門教科で構成されている。近年、企業の国際化や海外展開に応じた人材育成の必要性や、進学（大学3年次への編入）への関心の高まりを受け、学生に英語能力を身につけさせることが重要な意味を持つようになった。一方、低学年3年間の英語教科の授業時間数は、早期より専門教育を導入するカリキュラムのため、普通科高校と比べると限られている。その上、学生の卒業後の進路は、約60～65%が就職、35～40%が進学と分かれるため、普通科高校のように大学受験を共通の目標に設定できない。

2. 研究の目的

上記に記したように、学生が目標とする英語力が多様な環境において、教師の指導だけで学習者全員のニーズを満足させるのは困難をとめない、英語学習と専門教科学習との両立を考慮すると、効率のよい指導や学習が求められる。

本研究は、制約の多い学習環境において、授業以外においても自律的に学習できる方略的自己調整力の高い学生を育成するために、授業の中で学習ストラテジーを明示的に取り入れて指導することを最終目標とする。因子分析は、その基礎的な研究として位置づけられる。具体的には、英語学習において用いられる学習ストラテジーの現状について学生へのアンケートを基に考察する。因子分析をもとに、ストラテジー指導カリキュラムや指導教材開発に発展させる。

3. 研究の方法

本研究のリサーチクエスションは、次のとおりである。

- (1) SILL を用いて明らかになる高専生の学習ストラテジーの特性はどのようなものか。
- (2) (1) の学習ストラテジーの特性を S^2R モデルの枠組みで解釈できるか。
- (3) 学生の英語の熟達度と S^2R モデルの枠組で解釈した学習ストラテジーの特性には何らかの関係があるのか。
- (4) 新質問紙の妥当性や信頼性はどうか。
- (5) 高専生の学習ストラテジーからはどのような因子が抽出できるか
- (6) (5)で明らかになった学習ストラテジーの因子は S^2R モデルの枠組みで解釈できるか。

上記のリサーチクエスションに対して研究方法は、以下の通りにまとめられる。

- ・(1)～(2)については、SILLを用いたアンケート調査を実施し、因子分析を行い、 S^2R に照らし合わせた考察を行う。
- ・(3)については、GTECを実施し学習者の英語熟達度と因子との相関関係について考察する。
- ・(4)については、文献精査を行い、慎重に質問項目を検討し、質問紙を作成する。出来上がった質問紙は、妥当性や信頼性について考察する。
- ・(5)と(6)については、新質問紙を用いたアンケート調査を行い、因子分析を行った後、 S^2R に照らし合わせた考察を行う。

4. 研究成果

(1) SILL (Oxford 1990) を用いた高専生の言語学習ストラテジー調査

実施時期、対象者と英語熟達度

調査は、筆者の勤務する高専本科1年生（当時）155人を対象に実施された。これらの学生は、英語熟達度を計測するためにGTECを事前に受験した。本研究の対象となった学生のGTECの平均点は、385.1点（R: 140.2点、L: 144.4点、W: 100.5点）であった。なお、高校1年生のGTECスコアの全国平均は、412点である。

データ収集

GTECは、筆者の勤務する高専において、2016年の12月に実施された。SILLは同年度の1月に実施した。質問はOxfordのSILLを筆者が和訳したものをA4用紙に両面印刷したものを使用した。対象者には、1. 全然、あるいはほとんどあてはまらない、2. 通常あてはまらない、3. いくらかあてはまる、4. 通常あてはまる、5. 常に、あるいはほとんどあてはまる、から選んで回答するように、5件法で回答を求めた。回答の時間制限は30分とした。回答はマークカードリーダーを用いて読み込まれた。読み込まれた数値に基づき、統計ソフトウェアを用いて記述統計値が計算され、因子分析が行われた。

因子分析

SILLの言語学習ストラテジー尺度50項目に対して最尤法による因子分析を行った。スクリープロットを用いて確認を行った結果、3因子構造が妥当であると考えられた。累積寄与率は32.59%であった。次に、3因子を仮定した最尤法・Promax回転による因子分析を行った。内的整合性を示すクロンバックの α 係数(Cronbach's Coefficient Alpha)は、第1因子が $\alpha=0.85$ 、第2因子が $\alpha=0.82$ 、第3因子が $\alpha=0.81$ であった。得られた3因子とそれに該当する各項目の因子負荷量を表3に示す。抽出された因子に高い負荷を示している項目の内容を参考にし、Oxford (2011)の S^2R モデルを参考にした分類試案と照らし合わせながら、命名と解釈を行った。第1因子($\alpha=0.85$ 、15項目)は「英語で～」の表現を含む項目が多いのが特徴で、メタ認知ストラテジー項目、社会対人ストラテジー項目、メタ社会対人ストラテジー項目、情意ス

トラテジー項目、「認知ストラテジー項目が高い負荷を示し、S²R モデルの3つのディメンションとそれぞれのストラテジーとメタストラテジーの両方に及んだ。また、授業以外の日常において積極的にコミュニケーションに英語を活用する項目が高い正の負荷量を示していたので、「教室外コミュニケーション」因子と命名した。

第2因子 ($\alpha=0.82$ 、12項目) は多くの認知ストラテジーの項目が高い負荷量を示していたのが特徴であるが、メタ社会対人ストラテジーなどの項目も高い正の負荷量を示していた。S²R モデルの枠組みで検討すると、第2因子は、多くの認知ストラテジーの項目が高い負荷量を示しているのが第一の特徴であり、メタ認知ストラテジーとメタ社会対人ストラテジーと社会対人ストラテジーの項目も高い負荷を示していた。一方で、情意ディメンションのメタストラテジーとストラテジーの項目の負荷は高くなかった。Oxford (1990) の分類では記憶ストラテジーであった項目の多くも第2因子に高い負荷を示していた。第2因子は、感情を抑えて、分析や工夫を行っている様子が表現されている項目に高い負荷量が示されている因子で、授業中や自学自習中をイメージさせる項目が多く、「英語学習スキル」因子と命名した。

第3因子 ($\alpha=0.81$ 、15項目) は社会対人ストラテジー項目、情意ストラテジー項目、認知ストラテジー項目が高い正の負荷量を示していた。

S²R モデルに照らし合わせると、メタ認知ストラテジー、社会対人ストラテジー、情意ストラテジーの前向きな学習姿勢を表す項目が高い正の負荷量を示していることから、計画性、人との積極的な関わり合い、自己コントロールなどの前向きな姿がイメージできるので、「自己調整」因子と命名した。

次に、抽出された3因子の内部構造を見るため、因子間の相関関係を調べた。その結果を表4に示す。第2因子「英語学習スキル」と第3因子「自己調整」の間に中程度の相関が見られたが、第1因子は、他の2因子との相関が見られなかった。おそらく第1因子に含まれる項目の多くが、ある程度の英語コミュニケーション力があることを背景としていることを表しているからだと思う。それに対し、第2因子と第3因子で高い負荷量を示している項目は、第1因子の項目が示すようなコミュニケーション能力に達する以前の、授業で取り扱う範疇の内容を表す項目が多い点で共通している。このような共通点から、中程度の相関が見られたのではないかと考える。

「学生の英語の熟達度と学習ストラテジーの使用には何らかの関係があるのか」という問いに答えるために、GTECの得点と3因子との相関分析を行った。第1因子の「教室外コミュニケーション」は、GTECのいずれのスコアとも相関が見られなかった。第2因子の「英語学習スキル」は、総スコア、リーディングスコア、ライティングスコアで弱い相関 ($r=0.23$ 、 $p=0.005$; $r=0.21$ 、 $p=0.010$; $r=0.22$ 、 $p=0.007$) が見られた。第3因子の「自己調整」は、どのスコアとも相関がほとんど無かった。

上記の3つの因子から判断して、高専生の使用する学習ストラテジーは、ある程度の英語コミュニケーション力を背景とした因子と、教室の授業や自宅や寮での学習を想定できる因子、そして、計画性や自己コントロールなどの因子と、英語を学ぶ状況に応じたストラテジーを組み合わせて用いる傾向があると考えられる。S²R モデルの認知、情意、社会対人ディメンションのストラテジーとメタストラテジーという枠組みでの因子の存在は、ストラテジー別にはっきりと因子が分かれるものではない。今後もアンケートの質問項目を改善するなどして検討を続けるが、学習者は、その時どきに置かれた学習環境や状況に応じたストラテジーを組み合わせて用いているという特性への認識が必要である。

ここで、学習ストラテジーの特性をS²Rモデルの枠組みで解釈できるかという点を考察する。S²Rモデルの社会対人 (sociocultural-interactive) ディメンションでは、文化の役割が強調され、“dealing with sociocultural contexts and identities” (Oxford, 2011, p. 88) 「社会文化的コンテクストやアイデンティティーを取り扱う」とされている。このストラテジーは、まさに本研究の因子分析から浮かび上がった「教室外コミュニケーション」、「英語学習スキル」、「自己調整」の3つの因子に示される高専生の特性と関連性があると思われる。S²Rモデルのストラテジーの枠組みに、今回の因子分析で浮かび上がった学習者の置かれた学習環境や状況の因子を加えて考察することで、高専生が使用する学習ストラテジーがより分かりやすくなると思われる。

学生の英語の熟達度とS²Rモデルの枠組みで解釈した学習ストラテジーの使用には何らかの関係があるのかについてであるが、S²Rモデルの枠組みで解釈した第2因子の「英語学習スキル」と英語熟達度GTECの総スコア、リーディングスコア、ライティングスコアとの間には弱い相関があるだけで、他は、ほとんど相関が見られなかった。過去の研究では、メタ認知の使用が優れた学習者とそうでない学習者を区別する大きな要因となっているとの結果が示されているが (尾関、2010)、本研究では、その点については明らかにできなかった。今後は、学習者を上位群と下位群に分けて相関を見るなどして、より詳細な調査を行う必要がある。

結果と考察

(1)の因子分析からは、学習環境や状況への視点が提案されたが、この結果は、S²Rモデルの枠組みに示されている社会文化的コンテクストやアイデンティティーという視点とまさに関連していると考えられる。顧みると、個々の学習者が常に同じストラテジーを使用するのではなく、置かれた学習環境や状況に応じて、異なるストラテジーを組み合わせて用いていると考える

ことは、非常に自然なことである。筆者はこれまで、「メタ認知を持った学習者は、最終的にアカデミックな分野で成功する可能性が高く、優れた学習者とそうでない学習者を区別する大きな要因にもなっている」(尾関、2010、p. 95)ということだけに着目していた。メタストラテジーの指導のためのカリキュラムや教材を開発し、指導を実施し、その効果を確認する必要があると強く考えていた。しかしながら、今後はメタストラテジーの指導という視点に留まらず、社会文化的コンテキストやアイデンティティーも含んだ検討が必要だということが分かった。次の方向性としては、本研究の結果とS²R理論をさらに精査し、SILLを改良した新たな質問紙の開発を行い、それに沿った新しいストラテジー指導の考え方が必要である。

(2) S²Rに基づく新質問紙の開発

現時点では、OxfordのS²Rモデルに基づいた学習ストラテジーの質問紙は考案されていない。そこで、本研究ではまずOxford(1990)で分類されたSILLの質問項目をOxford(2011)のS²Rモデルと照らし合わせて、不足している項目を新しく加えて構築し直すことから始めた。

質問項目を作成するにあたっては、Oxford(1990)のSILLをベースに、Oxford(2011)のp.102~136にあるAppendicesに掲載された学習者の報告によるtacticsを参考にした。特に注意した点は、S²Rモデルの3ディメンション(認知、情意、社会対人)それぞれのメタストラテジーとストラテジーに関する項目数を偏らないようにすることだった。表1は、本研究で開発した質問項目の一部である。

表1. Oxford(2011) S²Rモデルを参考にし、SILLをmodifyした質問項目

ストラテジー Oxford(2011)	新質問紙項目
認知	1. 試験の出題傾向や対策に注意を払っている。
認知	2. 文法や発音、つづり、その他の詳細などに注意を払っている。
メタ認知	3. 明確な目標を設定している。 (途中省略)
メタ認知	11. ある学習方法を試して失敗した場合、その方法を改善している。
認知	12. 学習環境を整えている。(例：整頓する、耳栓をする、図書館に行く)
認知	13. 過去の試験問題や課題は、いつでも復習できるよう整理している。 (途中省略)
メタ認知	21. 自分が設定した目標が適切なかを考えている。
情意	22. 詳細や過ちにこだわらない。
情意	23. 困難に遭遇しても前向きに考える。 (途中省略)
情意	34. 焦りや緊張を感じた時に使っている対策がある。(例：深呼吸する)
メタ社会対人	35. 自分の英語力が低いから、伝える内容が本来の自分の水準より低くなると感じる。
メタ社会対人	36. 将来、英語力があるほうが有利だと思うから、英語を勉強しておく。 (途中省略)
認知	41. 理解や記憶を促進するために五感を活用する。(例：声に出す)
認知	42. 自分にすでにある背景知識を使って、英語の内容を推察し把握する。
認知	43. 英文のわからないところは、前後の内容から推察する。 (途中省略)
認知	51. いちいち全て日本語に訳さないように心がける。
情意	52. 英語の勉強で困難なことに直面した時は、自分を励ます。
情意	53. 英語の勉強で成果があったときは、自分に褒美を与える。 (途中省略)
社会対人	62. 英会話の相手や外国人と会話している時、間違いを直してもらおう。
社会対人	63. ペアワークやグループワークで英語を練習する時、積極的に取り組む。
社会対人	64. 英語での会話中、相手が次に何を言うか予想するようにしている。 (途中省略)
社会対人	72. 留学生や外国人のジェスチャーや身振りを真似る。
メタ社会対人	73. 留学生や外国人と接している時、自分の英語や身振りなどが適切かどうか考える。
メタ社会対人	74. 英語圏の文化の違いについて学ぶようにしている。 (途中省略)
メタ認知	80. 予習や復習にきちんと取り組んでいる。
メタ認知	81. 試験前はいつもより長い時間勉強に取り組む。
メタ認知	83. 英語の勉強は日頃から取り組んでいる。 (途中省略)
情意	91. 間違いを恐れずに英語を使うようにしている。
社会対人	92. 問われたことがわからない時は、ゆっくり話してもらおうか、繰り返してもらおう。
メタ情意	93. 英語のリスニング(聴解)は得意だ。

SILL のストラテジー別項目数 (Oxford, 1990) と SILL と本研究で開発した表 1 の質問項目の S²R に照らし合わせたストラテジー別項目数比較は表 2 のとおりである。

表 2. Oxford(1990) と Oxford(2011) の分類によるストラテジー別に見た項目数

ストラテジー	SILL	SILL	新質問紙
	Oxford (1990)	Oxford (2011)	Oxford (2011)
認知	14	18	
メタ認知	9	11	
情意	6	5	
メタ情意	-	1	
社会対人	6	10	
メタ社会対人	-	5	
記憶	9	-	
補償	6	-	
合計	50	50	

表 2 からわかるように、Oxford (1990) で開発された SILL の質問項目は、記憶ストラテジー、認知ストラテジー、補償ストラテジー、メタ認知ストラテジー、情意ストラテジー、社会対人ストラテジーと分類されている。この分類は、Oxford が S²R モデルを考案する以前に作成されたものであり、S²R モデルを用いた分類はなされていない。Oxford (2011) の S²R モデルのストラテジー分類と照らし合わせると、SILL には、メタ情意やメタ社会対人ストラテジーの質問項目が無く、各ストラテジーの項目数に大きな偏りが見られる。一方、筆者の開発した新質問紙は、各ストラテジーの項目数が完全に均等とは言えないまでも、S²R モデルのストラテジーの全てについて問う内容となっている。項目数については、認知ディメンションの項目数が多くなっているが、これについては、オリジナルの SILL でも同様であったように、学習者の採用するストラテジーとしては、学習者が外部と相互作用せずに自己の中で処理を完結できるという点で、認知ディメンションのストラテジーが多くなるのは当然のことと考えている。

(3) 新質問紙を用いた高専生の言語学習ストラテジー調査 対象者と英語熟達度

本調査は、高専本科 1 年生 161 人を対象に 2019 年 4 月実施された。実施段階では、本研究の対象となった学生には GTEC による熟達度の評価はまだ実施していないが、前年度の 1 年生の平均点は、385.1 点 (R: 140.2 点、L: 144.4 点、W: 100.5 点) であったことから、今年度もほぼ同等の学力と仮定した。

データ収集

新質問紙 100 項目を用いたアンケート調査は、B4 用紙に両面印刷したものが使用された。(1) の SILL の実施と同様に、各質問項目に対して、1. 全然、あるいはほとんどあてはまらない、2. 通常あてはまらない、3. いくらかあてはまる、4. 通常あてはまる、5. 常に、あるいはほとんどあてはまる、の 5 件法で回答を求めた。回答の時間制限は 45 分とした。マークカードリーダーを用いて読み込まれた数値に基づき、統計ソフトウェアを用いて因子分析が行われた。

新質問紙の信頼性と記述統計

新質問紙の信頼性を表すクロンバックの α 係数 (Cronbach's Coefficient Alpha) は、0.95 で、この質問紙の信頼度が高いことが確認できた。ストラテジー別のアンケートの点数の平均点の記述統計は下記の表 3 のとおりだった。

表 3. 新質問紙 (S²R モデルのストラテジー別) の記述統計

	認知	メタ認知	情意	メタ情意	社会対人	メタ社会対人
平均	3.54	3.36	3.04	2.98	3.17	1.88
標準偏差	0.59	0.61	0.49	0.48	0.57	0.96

因子分析

新質問紙 100 項目の回答に対して最尤法による因子分析を行った。スクリープロットを用いて確認を行った結果、4 因子構造が妥当であると考えられた。累積寄与率は 47.5% であった。次に、4 因子を仮定した最尤法・Promax 回転による因子分析を行った。内的整合性を示すクロンバックの α 係数は、第 1 因子が $\alpha=0.92$ 、第 2 因子が $\alpha=0.87$ 、第 3 因子が $\alpha=0.87$ 、第 4 因子が $\alpha=0.82$ であった。抽出された因子に高い負荷を示している項目の内容を参考にし、Oxford (2011) の S²R モデルを参考にした分類試案と照らし合わせながら、命名と解釈を行った。第 1 因子 ($\alpha=0.92$ 、22 項目) は、授業中または学校の授業を中心にした学習に関する項目が多いのが特徴で、認知ストラテジーとメタ認知ストラテジー項目が高い負荷を示し、S²R モデルの認知ディメンションとの関連性が高い。また、「71. 留学生や外国人と交流するための計画を立てる」の質問項目に対する因子負荷量が負の値 (-0.44) となっている点に着目し、「受動的勤勉性」因子と命名した。

第 2 因子 ($\alpha=0.87$ 、17 項目) は、社会対人とメタ社会対人ストラテジーの項目が高い負荷量を示している。DVD やインターネットなどのメディアを活用関連の項目や、留学生や外国人との交流に対する積極性に関する項目、学習ツールの利用や目標設定に関する項目の負荷量が

高かったので、「能動的学習傾向」因子と命名した。

第3因子 ($\alpha=0.87$, 16項目) は社会対人、メタ社会対人ストラテジー項目、情意、メタ情意ストラテジー項目が高い正の負荷量を示していた。スピーキングを中心としたコミュニケーションに関連する項目、友人と協力しながら学習する項目、情意を安定させようとする項目に負荷量が高かったので、「調和性」因子と命名した。

第4因子 ($\alpha=0.82$, 4項目) は、情意、メタ情意ストラテジー項目が高い正の負荷量を示しており、「44. 会話が長くように理解できなくても理解しているふりをすることがある。」には、負の負荷量を示していることに着目し、自己肯定感や自信に関連する項目の負荷量が高い点から、「自己肯定感」因子と命名した。

なお、因子別のアンケートの点数の平均点の記述統計は下記の表4のとおりだった。

表4. 因子別のアンケート調査結果の記述統計

	因子1	因子2	因子3	因子4
平均	3.71	2.81	3.29	3.82
標準偏差	0.64	0.65	0.66	0.61

記述統計からは、因子2の平均値が他の因子に比べると低く、この因子に寄与するストラテジーについて今後手当が必要だということがわかった。抽出された4因子の内部構造を見るため、因子間の相関関係を調べたが、全ての因子間で相関は見られなかった。すなわち、因子はそれぞれ独立性が高いということが分かった。

S²Rでは、学習者が重要な役割を果たし、学習者は場面に応じた適切なストラテジーを選び、組み合わせて活用する戦略的自律学習者 (Strategically self-regulated learners) であるとしている。上記で抽出された因子について考察すると、第1因子では、場面として想定されるのは、授業中、試験前、課題や宿題への取り組み時などである。第2因子では、留学生や外国人と交流したり、メディアやツールを活用して学習したりする場面が想像できる。また、第3因子では、情意的に安定した環境、楽しみながら友人など他の人と学ぶ環境が浮かび上がってくる。

結果と考察

新質問紙によるストラテジーの因子分析から抽出された4つの因子は、本研究の前半の(1) SILL (Oxford 1990) を用いた高専生の言語学習ストラテジー調査で行なった因子分析の結果に近いことが分かる。SILLの第1因子「教室外コミュニケーション」は、新質問紙の第2因子「能動的学習傾向」と、SILLの第2因子「英語学習スキル」は、新質問紙の第1因子「受動的勤勉性」と、SILLの第3因子「自己調整」は、新質問紙の第3因子「調和性」とコンテキストがたいへん近い。SILLの因子分析でぼんやりと見えていた高専生の英語学習ストラテジーの因子は、この新質問紙により、因子負荷量の高低が数字に表れ、より適確な因子の抽出につながった。その結果、因子名もより鮮明に命名することができた。

本研究では、S²Rモデルの認知、情意、社会対人ディメンションのストラテジーとメタストラテジーという枠組みでの因子の抽出において、学習者はその時どきに置かれた学習環境や状況に応じたストラテジーを組み合わせて用いている特性を示すことができた。今後の課題は、新質問紙の質問項目の改善を重ね、因子分析を継続し、この特性が経年的に変化するののかについて検討することである。また、今回の研究期間内で達成できなかった言語学習ストラテジーの教材開発については、できるだけ早くに開発と実施を実現し、その効果を確かめたい。

<引用文献>

①Oxford, R.L. (1990). Language learning strategies: What every teacher should know. Boston: Heinle and Heinle/Cengage.

②Oxford, R.L. (2011). Teaching and researching language learning strategies. London: Pearson.

③尾関直子、学習ストラテジーとメタ認知、小嶋英夫・尾関直子・廣森友人(編)、成長する英語学習者—学習者要因と自律学習者—、2010、75-103

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

①勝藤 和子、高専生による言語学習ストラテジーの使用について、四国英語教育学会『紀要』、査読あり、38号、2018、17-28

②勝藤 和子、速読訓練と学習ストラテジー、四国英語教育学会『紀要』、査読あり、36号、2016、39-53

〔学会発表〕(計3件)

①勝藤 和子、S²Rモデルに基づいた学習ストラテジー質問票の試作、第44回全国英語教育学会京都研究大会、2018

②勝藤 和子、精読・速読指導と読解ストラテジーの発達について、第43回全国英語教育学会島根研究大会、2017

③勝藤 和子、熟達度別学習ストラテジーの使用について--高専1年生のデータから、第42回全国英語教育学会埼玉研究大会、2016